

# 『或る女』論\*

—葉子と倉地の関係に関わる一考察—

정 육 성\*\*

(e-mail : jungsung@nsu.ac.kr)

## < 목 차 >

- |               |               |
|---------------|---------------|
| 1.はじめに        |               |
| 2. 木部と葉子      |               |
| 3. アメリカ行きの船で  | 4. 倉地について     |
| 3.1. 田川夫人について | 5. 終りに-13章を読む |
| 3.2. 岡について    |               |

キーワード：破滅(Ruin), 屈辱(Humiliation), 偽善(Hypocrisy), 錯覚(Illusion), 登場人物(Character)

## 1.はじめに

『或る女』の主人公である早月葉子は、裕福な家庭に生まれ、才気滲刺な性格で時代を先駆けた女性であった。葉子は最初の戦利品として木部という従軍の英雄記者を自分の持ち物にした。しかし、長くは続かず自分の選択が間違ったことに気づき、木部と決別する。世間からは離婚歴のある女としての傷を抱いたまま、再起を計っていた葉子は、実業家の木村との結婚を受け入れて、アメリカ行きの船に乗る。気が向かない選択ではあったが、今の葉子にはこれしか道はなかった。だが、葉子はアメリカ行きの船で出会った船員の倉地と駆け落ちをし、彼との不安定な生活の末に寂しく死を迎える。

木村ではなく倉地を選択することは、世間から指弾の対象になるという認識が葉子にもなかったとは思えない。にもかかわらず、なぜ木村ではなく倉地を選んだのか。すでに木部との結婚の失敗を経験した葉子ではないか。結局、葉子は倉地を選び、不幸なる道を自ずと選択してしま

\* 이 논문은 2018년도 남서울대학교 학술연구비 지원에 의해 연구되었음.

\*\* 남서울대학교 일본어과 전임교수, 일본문학

う。そして、それ以後は当たり前のように、着々とその破滅に向かって進むのである。

このように有島武郎の『或る女』は、主人公早月葉子の悲劇的な結末を描いた破滅物語である<sup>1)</sup>。『或る女』の破滅傾向は、既に多く指摘されたことではある<sup>2)</sup>。これらの先行研究で、葉子の破滅の原因に関して一貫して述べられていることは、「本能」及び「暗い力」である。「彼女が本能的な内心の要求によって生きようとすればするほど加速度的な勢いで破滅への道をたどらざるを得ない」<sup>3)</sup>という指摘や「有島は『或る女』で〈本能的な生活〉者の自滅過程を濃密に描いた」<sup>4)</sup>作品である指摘から窺われるように、『或る女』の破滅の原因が葉子の「本能」に起因しているということは、いまさら議論するまでもないだろう。

本論は『或る女』が破滅物語であるかどうかという点について論するつもりではない。葉子の破滅の原因が今まで多く指摘された「本能」及び「暗い力」によるということは、葉子が木村ではなく倉地を選んだことを意味する。「本能」に生きる主人公としての葉子の指摘は、多くあげられたことだが、実際に不幸な道とは知りながらなぜ倉地と一緒にしてしまったか。長い旅程のアメリカ行きの船のなかで一体何があったのか。それについて本論を通して探してみたいのである。

## 2 木部と葉子

葉子と木部は炎のような恋の力に惹かれ、親の反対を押しきって、やり通した二人きりの寂しい結婚、そして新婚生活の始まり、二人には密のような甘い時間のはずだった。しかし、二人の新婚生活は長続きしなかった。すぐに破局を迎えてしまう。二人の恋の道程について、拙稿の中で既に論じたことである。<sup>5)</sup>

- 
- 1) 筆者の拙稿である「有島武郎『或る女』論—破滅物語—」（『日本文化学報』2003年5月）の中で言及した。
  - 2) 島田福子「破滅への愛情—『或る女』を中心に—」（『文学』昭和24年5月）pp.286-291、奥野健男「有島武郎『或る女』の早月葉子」（『国語学』昭和34年5月）p.85、小坂晋「『石にひしがれた雑草』と『或る女』—主人公の精神構造と主題—」（『日本近代文学』昭和41年5月）pp.192-213、重松泰雄「〈或る女〉の早月葉子」（『国文学』昭和44年10月）p.157、佐々木靖章「〈飛躍の論理〉の構造—『或る女』論のための一視点—」（『文芸研究』昭和47年6月）pp.36-47、外尾登志美「『或る女』の主題「暗い力」（『日本文学』昭和53年9月）pp.50-61、江藤茂博「『或る女』成立に関する式論—破滅への視座をめぐって」（『武蔵大人文学会雑誌』昭和59年12月）pp.63-80。
  - 3) 上杉省和「『或る女のグリンプス』から『或る女』（前編）へ」（『国語国文研究』昭和43年9月）引用は『有島武郎一人とその小説の世界—』（昭和60年4月、明治書院）からp.259。
  - 4) 山田昭夫『有島武郎』（昭和41年1月、明治書院）pp.130-154。
  - 5) 鄭旭盛(2011)「『或る女』論—木部という人物について—」（『日本文化学報』第51輯、韓国日本文化学会、pp.339-451。

葉子にとって木部との結婚生活は、人間の〈性〉の裏面にいかなるものが潜んでいるのかに関する、新たな認識をもたらした経験であった。言うまでもなく、夢にも知らなかった木部の「偽善」的な面を見てしまったのである。葉子にとって木部から認識された〈性〉の「偽善」は、実は初めての経験ではなかった。「葉子は男性たちの偽善性をみぬいていた。彼らは「怨恨」、「憤怒」を見せなかったことも葉子にあったのではなく、自分たちの偽善性を覚えてしまったからであろう」<sup>6)</sup>ことからも察される。彼らは葉子を罵るより、自分の「偽善」に気が付き、一人残らず「自分達の獣性」を恥じらうばかりであったことを、すでに経験した葉子である。

早くから獣性をくらます男たちの「偽善性」を見抜いていた葉子は、なぜ木部に引かれたのだろうか。それは過去に出会った多くの男の中の一人として見ていたのではなく、木部からはそれらの男とはちがう、ある社会的な品格の高さを見たからだ。木部は当時の日本社会で「天才記者」として名を轟かした才能のある文筆家として「英雄」と讃えられてもいた。次は当時の木部の人気が社会的に何れぐらいであったかを物語っている。

木部の記者としての評判は破天荒といってもよかった。いやしくも文学を解するものは木部を知らないものはなかった。人々は木部が成熟した思想をひさげ世の中に出て来る時の華々しさをうわさし合った。ことに日清戦役という、その当時の日本にしては絶大な背景を背負っているので、この年少記者はある人々からは英雄の一人とさえして崇拝された。  
(『或る女』p.16)

葉子はこれまでの男たちとは違うはずだろうという思いで、「英雄」たる木部を見ていた。しかもそればかりではなく、木部の「性格」や「容貌」までが葉子の深い関心を惹いていたのである。葉子は木部に「一種の好奇心」を抱く。一方「木部の全霊はただ一眼でこの美しい才気の張り溢れた葉子の容姿に吸い込まれてしまった」のである。

しかし、二人の結婚生活は長く続かなかった。葉子は木部を通して夢にも思わなかった実像に出会ったからである。その新たな実像とは、木部もやはり葉子が以前に経験した他の男たちと、何ら変わりのないただの一人の男にすぎなかったということである。社会的な「英雄」たる品格の高さが男性の「獣性」を隠した新たな「偽善」に出会ったわけである。結局、葉子は男というもののどうしようもない根元的な「獣性」を見てしまった。

このような葉子の新たな認識は、単に木部を通して獲得した男性の性の問題ではなく、葉子自身の問題でもあった。<sup>7)</sup>葉子に深い傷を与えたのは、ここだった。これは男性の問題を越え、

6) 有島武郎『或る女』p.15. ※本論で使用される『或る女』のテキストは、新潮文庫版(平成11年5月)を用いた。

7) 5)と同じ 「〈性〉の醜い欲求を裏に隠す〈偽善〉たる木部。そしてそれを見た葉子は木部ではなく、まるで「鏡」に映る自分をみたように、人間のいわゆる〈偽善〉という側面を葉子は木部との結婚生活を通して、見てしまったと言うことであろう。」

人間そのものの〈性〉の問題であった。

葉子はもうこれ以上19才の純粋な少女ではない。人間というものの性の本質が何であるかを、知りつくした子持の離婚歴のある女の身である。結婚に失敗し、しかも子持の女として生きていくことは、当時の社会からすると、少なくない負担であったはずである。人間の〈性〉に対する新たな認識を経験した葉子、当時の社会を勘案すると謹み深い生活の中に、身をかくまっているしかなかった。慎みながら次を狙っていた彼女に、再び一般社会の一員になれる機会が訪れてきた。アメリカで成功した実業家の木村との再婚である。結婚の失敗から建て直すためにも、経済的な面においても、この再婚は葉子に避けられない唯一の脱出口である。過去に付き合った男たちや木部を通して経験した人間の〈性〉の正体に対する認識を後にして、普通な生活を営むするための葉子に残された最後の選択、つまり社会との和解の道でもあったわけである。

しかし、木村に向かって乗り出した船で、葉子は倉地という船員に惹かれる。木村との再婚で、社会的にも経済的にも安定した生活を決心して、アメリカ行きの船に乗っていた葉子の思いとは裏腹に、船員の倉地と恋に落ちてしまう。このような選択に至るまで、葉子には一体何があったのか。思えば、このような葉子の選択には、既に木部との結婚生活を通して獲得した人間の〈性〉の正体に対する認識もしくは学習などが影響したと推定される。人間の〈性〉に関する学習を通して、早くから葉子に内在されていた〈性〉の自覚が倉地という人物と遭遇によって、葉子の内面に潜んであった〈性〉の正体が刺激され、刺激された〈性〉の潜在が葉子を倉地に引き付けたのだらうと思われる。アメリカ行きの船のなかで、葉子に一体何があったのか。それについて章を改めて詳しく考察を行って見よう。

### 3. アメリカ行きの船で

葉子にアメリカ行きは、自分にとって生活の改善を計るための大きな転換の意味を持っている。実は木村は葉子の心の相手ではなかった。だが、自分が置かれている今の状況、つまり経済的な面で困難を強いられている葉子にあんまり選択肢がないのが現状である。家族や親族からの勧誘、そして亡くなった親のかわりに見守っていかねばならない妹たちの生活費や学費、金遣いが荒い本人のことを勘案してみても、生活を立てていくことがそれほど簡単なことではなかったはずであろう。そんな彼女に、アメリカで実業家として成功した木村は、立派な後見人であった。つまり、葉子にとって木村は、心が惹かれる対象ではなかったが、現実的な困難から抜け出すために経済的な後見のような存在であったわけだ。否応なしに、葉子は心を入れ替えて木村に向かうことを決めて、彼に会うためにアメリカ行きの船に乗るしか方法がなかった。

しかし、アメリカ行きの船の長い旅程は、葉子を予期せぬ出来事の渦に巻き込んでしまう。同

じ船に同船した田川夫婦、若い青年の岡、そして船員の倉地、これらの人との出会いは、船の揺れと共に葉子の心も大きな揺れを見せる。最初は婚約者木村に向かうはずの船の旅程であったが、全く別の方向に動き始める。アメリカ行きの船の中で、一体何があったのか。これらの登場人物と葉子との間に一体何があったのか。

### 3.1. 田川夫人について

アメリカ行きの船という限定された空間が葉子と田川夫人とを否応なしに互いを強く認識しなければならないようにした。このような葉子と田川夫人との張り詰めた緊張関係については、すでに拙稿を通して論じたことがある<sup>8)</sup>。葉子は田川夫人について最初は次のように認識していた。田川夫人は「日本社会で成功した」女性で、葉子も彼女から「シンボリックな意味で葉子の理想的な対象」の手本ではあった。だが、長い船の旅程の中、段々と田川夫人の素顔を見抜き始めた葉子は、「貴婦人に似合わない欺瞞的な行動を通して暴かれる偽善性」や同じ女性としての「嫉妬の対象」になっていたことを、拙稿で指摘したことがある。このような根拠として作品の中の次のところは、注目に値する。

「事務長はあなたのお部屋にも遊びに見えますか」

と突拍子もなくいきなり問いかけた。それを聞くと葉子の心は何という事なしに理不尽な怒りに捕らえられた。得意な皮肉でも思い存分に浴びせかけてやろうかと思ったが、胸をさすり下してわざと落付いた調子で、

「いいえちっともお見えになりませんが……」

と空々しく聞こえるように答えた。夫人はまだ葉子の心持ちには少しも気付かぬ風で、

「おやそう。私の方へは度々いらして困りますのよ」

と小声で囁いた。「何を生意気な」葉子は前後なしにこころの中に叫んだが一言も口には出さなかった。敵意—嫉妬とも云い代えられそうな—敵意がその瞬間からすっかり根を張った。(『或る女』 pp.123-124)

船の中で醸成された田川夫人与葉子との緊張関係は、葉子にして倉地に関心を注がせる原動力として働き、結局倉地との望ましくない関係にまで発展する一つの契機になったのである。

葉子は始めて倉地に出会った瞬間から不思議な力に惹かれるように、ある種の関心が芽生えていた。しかし、葉子自身は必死の思いで倉地に対するその思いを断ちきろうとした。それは木村とのこともあったが、田川夫人の視線も気になっていただろう。倉地を始めてみてから、ある種の衝撃と驚きで、注がれていた関心に対して警戒していたことは、恐らく田川夫人の存在があったからだ。

8) 「『或る女』論—田川夫人について—」(『日本言語文化』第23、2012年 12月) pp.413-427.

そのような存在感として田川夫人を認識してただけに、葉子にとって田川夫人の先の引用の偽善的な行動に「理不尽な怒り」を感じさせたばかりではなく、ある反発的な念をより煽り立てただろう。「葉子は倉地を全身全力で否定し、倉地なんか全然く気にする」ことのない自分を偽造しようとしていた葉子自身の内面」<sup>9)</sup>が田川夫人の偽善を目の当たりにする瞬間、ある「嫉妬」の炎を内面に激情し始めることと共に自ずと抑制していたはずの倉地に対する感情が噴出し始めたと見える。今まで我慢の域に押さえていた葉子の理性が田川夫人の偽善たる行為でこれ以上の制御がきかず、理性の域を越えてしまったのである。

田川夫人とのことでもう一つ見逃してはいけないのは、葉子と田川夫人との力学的な変化である。長い船の旅程という特殊な空間が作用したのか、船内では異常な気流が感じられ始める。段々田川夫人に対する関心が薄れ、その代わりに葉子に対する関心が増し始める。異常な空気を感じ取った田川夫人は、「妬みひがみ」をまんまと見せ始める。以後、田川夫人の葉子に対する態度が「戸板を返すように違」う見構えを見せはじめる。結局、田川夫人と葉子との関係が「いつのまにか田川夫人と対等で物をいい合っても少しも不思議とは思わせないほどの高みに自分を持ち上げてしまっていた。落ち目になった夫人は年がいもなくしどろもどろになっていた。」（『或る女』 p.136）とあるように、百八十度変貌された関係になってしまう。

面白いことは、以前母との揉み合いから木部を選択した時の構造と同じように、田川夫人との張り切った緊張関係から倉地を選んだことと似寄るところがある。いずれにせよ、この時点から葉子に耐えきれない嫉妬、いや嫉妬というより些細な憤怒を感じ始める。このような感情の現れは、田川夫人との新たな関係性、即ち先ほどの引用であったように「対等」な関係になっていたことを意味するのである。このような些細な憤怒を覚え始めていた葉子の感情を次の引用からよく伺うことができる。

夫人はよけいな見当違いをして、痛くもない腹を探っている、事務長がどうしたというのだ。母の胎を出るとそのままなんの訓練も受けずに育ち上がったようなぶしつけな、動物性の勝った、どんな事をして来たのか、どんな事をするのかわからないようなたかが事務長になんの興味があるものか。あんな人間に気を引かれるくらいなら、自分はどうに喜んで木村の愛になずいているのだ。見当違いもいいかげんにするがいい。そう歯がみをしたくらいな気分です。 （『或る女』 p.138）

ここでは葉子の余裕が感じられる。木部の時、母から勝利を納めた時と同じように、もう勝負有りという感じであろう。田川夫人との緊張関係が緩和され、葉子のほしいままの状況になったに違いない。以上の考察のように、登場人物の田川夫人は、この作品の中で倉地と葉子との好ましくない関係への転換において欠かせない影響を与えた注目に値するほどの人物であるに違いない。

9) 8) と同じ。

### 3.2. 岡について

今まで登場人物の中で、岡についてそれほど関心を注いでいなかったことは事実であろう。作品でも彼の存在感は、外の登場人物に比べてあんまり目立たない。登場人物としての存在感を考えると、なくてもいいような人物であると言って良いほどだ。なのになぜ岡という人物を登場したのだろうか。そもそも岡に託したかった作意は、何だったのか。ここではその点について考察してみよう。

作品での存在感が少ない岡とは言え、やはり葉子と倉地との好ましくない関係にまで進展することと深く関連していたと思われる。船に乗ってから始めて食堂に出た葉子は「一人の上品な青年」である岡に出会う。「上品な青年」は「葉子と一目顔を見合わせたのが最後、震えんばかりに興奮して、顔を得上げない」（『或る女』 p.116）でいたのに、あの青年とは違って、事務長の倉地だけは「一向動かされた様子が見えぬばかりか、どうかした拍子に顔を合わせた時でも、その臆面のない、人を人とも思わぬような熟視は、かえって葉子の視線をたじろがした」（『或る女』 p.116）のである。

岡は私かに葉子に心を寄せていた若い青年である。「上品な青年」と思っていた葉子は、岡がなによりも品の高い青年としての品格を備えた人として映っていたらしい。いかに岡が葉子に関心を寄せていても、葉子に受け入れることはなかっただろう。なぜなら同じ品の高かった木部を通して、ある種の男性の獣性を経験した葉子には、これ以上同じ失敗を繰り返すはずがない。容易に葉子のタクトの虜になる岡とは違って、倉地はなかなかその心の中を見せない。このような倉地の高慢な態度をより際立たせているのが、他ではなく岡の存在である。

このように岡の作品に置ける存在感は、ある意味で倉地の男振りを物語るためのバロメータであったのかも知れない。しかし、岡に託していたのは、それだけの役割を担う人物ではなかった。作品の次の所は岡に託した作意が倉地の高慢な態度をより際立たせているだけでなく、もう一つの作意をを託していたことがよく伺われるところである。これは第13章の「屈辱」感に葉子が振り回されて、長く甲板に居続けていた場面である。そこで倉地と岡が現れる。葉子はもう部屋に戻ろうとするが、甲板に長く居続けていたせいか、足が痺れ容易に歩けない。その時、岡の肩を借りながら歩き始める。

鋭敏な馬の皮膚のようにだちだちと震える青年の肩におぶいかかりながら、葉子は黒い大きな事務長の後ろ姿を仇かたきでもあるかのように鋭く見つめてそろそろと歩いた。西洋酒の芳醇な甘い酒の香が、まだ酔いからさめきらない事務長の身のまわりを毒々しい靄となって取り巻いていた。放縦という事務長の心の臓は、今不用心に開かれている。あの無頓着そうな肩のゆすりの陰にすさまじい desire の火が激しく燃えているはずである。葉子は禁断の木の実を始めてくいかいだ原人のような渇欲をわれにもなくあおりたてて、事務長の心の裏をひっくり返して縫い目を見窮めようとばかりしていた。おまけに青年の肩に置いた葉子の

手は、華車とはいいながら、男性的な強い弾力を持つ筋肉の震えをまざまざと感ずるので、これらの二人の男が与える奇怪な刺激はほしいままにからまりあって、恐ろしい心を葉子に起こさせた。木村……何をうるさい、よけいな事はいわずと黙って見ているがいい。心の中をひらめき過ぎる断片的な影を葉子は枯れ葉のように払いのけながら、目の前に見る蠱惑におぼれて行こうとのみした。口から喉はあえぎたいほどにひからびて、岡の肩に乗せた手は、生理的な作用から冷たく堅くなっていた。そして熱をこめてうるんだ目を見張って、事務長の後ろ姿ばかりを見つめながら、五体はふらふらとたわいもなく岡のほうによりそった。

(『或る女』 pp.132-133)

少し長い引用になってしまったが、ここの引用は注目に値する。葉子は前に歩いていく倉地の「無頓着」な肩を眺めながら、その後ろ姿とは裏腹に倉地という男の内面は、きっと「陰にすさまじい desire の火が激しく燃えている」だろうと確信する。葉子のこのような確信は岡の肩に置いたその手を通して伝わる確信であった。岡の肩においた手から伝わるのが「恐ろしい心を葉子に起こさせた」のだ。

木部を始め多くの男たちを経験した葉子にしてみれば、男たちの獣性を見抜いていたはずだった。葉子の手伝に伝わる「男性的な強い弾力を持つ筋肉の震え」を岡から感じながら、その眼は倉地の肩を見ている。このような「二人の男が与える奇怪な刺激」による葉子の錯綜は、木村に向かって行く自分に、容赦なく「うるさい」と心のなかの叫びと共に、ある勇気を吹き込んでいく。葉子の心の奥に沸き上がる勇氣、木村ではなく倉地に向かっていくその勇氣は、このように岡を通して獲得した勇氣であった。このように岡という登場人物は葉子と倉地との好ましくない出来事と深く関連していた人物であると見なされる。つまり、二人の関係のための作意を担う欠かせない媒介人物であった。

田川夫人との緊張関係や岡に託した作意は、葉子と倉地との炎のような恋と何らかのことで深く関連しれていることを、上記の考察を通して確認できたと思われる。しかし、これらの登場人物の影響があったとしても最も大事なものは葉子と倉地の二人のことである。一体、葉子にとって倉地という人はどのような存在であったのか。章を改めて倉地という人物について、そして倉地に対する葉子の思いについて考察を続けよう。

## 4. 倉地について

倉地という人は「日本郵船会社絵島丸事務長勲六等」職務を持っている倉地三吉で

ある。「大きな黒い顔」や「濃い眉から黒い口髭」、「太い頰」と「がっしりした肩」、そして「その腕からは、強く烈しく海上に生きる男の力」を漂わせる。これらの人相着衣から荒い海で長く鍛えられた強い海の男であることを十分に伺える。それに「しぶとそうな顔」や「insolentな目付き」などからは、「高慢ちきな乱暴」感を漂わせる。おまけに、「塩がれた強い声」と「芳醇な酒のしみと葉巻煙草との匂い」を放す。まさしく海の男そのものである。

葉子に絡み合う若者を事も無げに軽々しく棧橋まで連れておいて、また船に戻る倉地の一連の「早業」を棧橋で見送りに来た人々や船の人々が驚きで「見張」る。この場面は田川夫妻に対する群衆の万歳や以前に木部の従軍記者としての英雄的な人々の関心などとは、質的に違う。倉地に注がれた視線は、肉体的な能力をもとに、その「早業」に驚いた感嘆の視線であった。勿論、葉子の視線も外の人々の視線と違いはなかったはずであろう。

男前の倉地を始めて見た時、葉子は非常に衝撃的であったようである。次の本文はそれをよく表している。

遠い幻想の国から一足飛びに取って返した葉子は、夢でもなく、まがいもなく眼の前に立っている船員を見て、何という事なしにぎょっと本当に驚いて立ちすくんだ。始めてアダムを見たイブのように葉子はまじまじと珍しくもない筈の一人の男を見やった。

(中略)

がっしりした肩をゆすって、勢いよく水平に延ばしたその腕からは、強く烈しく海上に生きる男の力が迸った。葉子は黙ったまま軽くなずいた。胸の下の所に不思議な肉体的な衝動をかすかに感じながら。(『或る女』p.93)

結局、二人は好ましくない関係になるわけだが、この時葉子には想像もしなかったことだろう。引用で何よりも「驚」く葉子の姿が非常に印象的である。

倉地は葉子が今まで「勝手気儘を振舞った」時に偶然出会った男たちと全く異なる男である。木部をも含めて、特にここの棧橋まで追い掛けて来た若者を始め葉子が出会った若者達とは、今まで一度も経験したことのないタイプの倉地である。この時の葉子の衝撃を、「始めてアダムを見たイブ」に例えている。アダムとイブ、太初の裸の人である。何の飾りもなければ、人が人を始めて出会うという意味が含まれている。つまり、それは太初の一人の男と一人の女の出会いに例えていたのである。葉子にとって木部と別れてから捨て鉢の気持でだれかれと偶然に出会った男たちではなく、アダムしかないイブの運命的な出会いの意味であっただろう。

しかし、二人の運命的な出会い、そしてその感情からくるある種の「驚」きや「肉体的な衝動」がそのまま見知らぬ一人の船員に対する恋にはなれなかった。何よりも棧橋には、見送りのために来ている数多い人々の視線、そして社会的に名望が高い田川夫妻が間近に立ち寄っている状態ではないか。葉子が倉地を心に思うという事はまずありえない。そして今まさに木村に向かって出航しようとする葉子にして見れば可能なことではないはずだ。というよりも、そんな思いを抱くことは、葉子に一種の羞恥に値することでもある。先ほど酒に酔った知らない若者に肩を捕まれて棧橋の人々の前で恥をかいたばかりではないか。「親類や朋輩達」の視線ばかりではなく、「船員も乗客も申し合わせたように葉子の方を見守っていた」のである。これらの視線を知らない若者との揉み合いによって感じさせなければならなかった葉子であってみれば、今倉地を心の中で思うという事は可能なことではない。

既に木部との結婚の失敗と子持の母としての生活を通して世間からの痛い視線をさんざん浴びていたことの経験がある葉子である。まさに、船が棧橋から遠ざかっていくにつれて、葉子の内面から寄せてくる「虚ろな余裕」という神妙な感情は、葉子自身がいかに人々の視線を強く感じていたかを物語っていたに違いない。ただその時、私かに葉子は倉地という衝撃的な人の存在感を思わず覚えさせたことは事実である。

棧橋での衝撃的な初出会いから葉子の頭からつきまとう倉地の思いは、なかなか払い除けることができない。アメリカ行きの船がようやく出向し始めると「虚ろな余裕」のせいか、葉子は先ほど棧橋で絡み合った見知らない若者を思い出す。しかし、その若者に対する思いは、すぐ倉地への思いに移る。次の引用はその場面である。

幻想はまたかの若者に還って行った。葉子はふと右の肩に暖かみを覚えるように思った。そこには若者の熱い涙が浸み込んでいるのだ。葉子は夢遊病者のような眼付きをして、やや頭を後ろに引きながら肩の所を見ようとすると、その瞬間、若者を船から棧橋に連れ出した船員の事がはっと思い出されて、今まで盲いていたような眼に、まざまざとその大きな黒い顔が映った。葉子はなお夢みるような眼を見開いたまま、船員の濃い眉から黒い口髭のあたりを見守っていた。（『或る女』 p.93）

いよいよアメリカ行きの船は日本を離れ、アメリカに向かって出航する。出航する船のデッキに立って、先程棧橋で起きた若者とのことを思い出す。葉子の若者についての思いがもしかすると倉地を思い出すためではなかったのかと疑われなくもない。とにかくその真意はどうであれ、若者の手が触れられた葉子の肩から感じられる肉体的な感触と同時に、かの船員の幻想をみる葉子の姿が上記の引用から窺われる。

この引用で特に注目を引くことは、倉地の幻想を見たとき「今まで盲いていた」葉子の眼で

はなく、新たな眼で見極めていた葉子の視覚の変化である。「今まで盲いて」いたとは今まで見たこともない、経験したこともないことの意味としても読める。しかも葉子にとって初体験の男、倉地という一個の船員の存在が葉子の脳裏から用意に離れることもなく、この時から付きまとう。

船が日本を離れて三日が過ぎても葉子は人々の前に出ることなく、自分の部屋に閉じこもり食堂にも出ないで専ら今までの自分を省みる。その回想で葉子自身の意識が現在に近づくにつれて、必ず倉地の思いに至ってしまう。作品の次のような所はそれをよく表わしている。

そして記憶はだんだんと過去から現在のほうに近づいて来た。と、事務長の倉地の浅黒く日に焼けた顔と、その広い肩とが思い出された。葉子は思いもかけないものを見出したようにはっとなんと、その幻像は他愛もなく消えて、記憶は又遠い過去に帰って行った。それが又段々現在のほうに近づいて来たと思うと、最後にはきつと倉地の姿が現れ出た。（『或る女』 p.104）

葉子の意思とは裏腹に思いの挙げ句には必ず倉地に収斂する。この以後も葉子の意思は、絶え間なく倉地を思い浮かべる。

肩にしっかりとしがみ付いて、泣きおめいた彼の狂気じみた若者の事を思った。と、すぐそのそばから若者を小わきにかかえた事務長の姿が思い出された。小雨の中を、外套も着ずに、小荷物でも運んで行ったように若者を棧橋の上におろして、ちょっと五十川女史に挨拶して船から投げた綱にすがるや否や、静かに岸から離れてゆく船の甲板の上に軽々と上がって来たその姿が、葉子の心をくすぐるように楽しませて思い出された。

夜はいつのまにか明け離れていた。眼窓の外は元のままに灰色はしているが、活々とした光が添い加わって、甲板の上を毎朝規則正しく散歩する白髪の米人とその娘との足音がこつこつ快活らしく聞こえていた。化粧をすました葉子は長椅子にゆっくり腰をかけて、両足をまっすぐにそろえて長々と延ばしたまま、うっとりと思うともなく事務長の事を思っていた。

（『或る女』 pp.110-111）

葉子はその事を耳にしながらやはり事務長の事を思っていた。「三日も食堂に出ないで閉じこもっているのに、なんという事務長だろう、一ぺんも見舞いに来ないとはあんまりひどい」こんな事を思っていた。そしてその一方では縁もゆかりもない馬のようにただ頑丈な一人の男がなんでこう思い出されるのだろうと思っていた。（『或る女』 p.112）

「思い出され」たり、「うっとりと思うともなく」倉地を思い出すことは、してはいけないことであるはずだ。葉子は今婚約者の木村に会いに行く身ではないか。勿論葉子自身も頭では分かっているながらも、人々の視線から遮断された自分の部屋で一人閉じこもった状況なのか、葉子の

意思とは裏腹に「一人の男」が煩わしく付きまとう。倉地を思い出すことが葉子にとってあんまりいい気にはなれないはずだろう。

「三日も食堂に出ないで閉じこもっているのに、なんという事務長だろう」と思っていたのだろうか、これ以上部屋に籠もらず、食堂に出る葉子である。始めて食堂に出た瞬間、葉子の意識が作用したかどうか知らないが、とにかく葉子の眼が真っ先に向いたのは、田川夫婦でも「外の船客」でもなく、倉地であった。この時も葉子の眼は「事務長の挙動を仔細に見る事に半ば気を奪われていた」のである。このように、葉子は倉地からその神経が絶えず離れることが出来ないうちでいたことが分かる。

葉子の視線は思わず気になる倉地に向けてしまうが、一方の事務長からは「脆くも手きびしく追い退けられ」てしまう。田川夫人の「冷たい瞳の光」を除いて、食堂にいる人々はみな葉子に視線を浴びせかけているのに、なぜか倉地だけは葉子に視線を一向も向けることはない。見慣れない倉地のリアクションに戸惑いと微かな憤怒を覚えてしまっただろう。なぜなら、葉子にしては今まで付き合ってきた他の男たちとは違って、全く別なパタン、葉子には経験したこともない新たなパタンであったからだ。倉地という男が自分の思うつぼにはなれないことで、葉子は密かに戸惑いや憤怒、そして苛立たしさを感じていただろうと思われる。

初めはある程度、倉地と距離を置こうとしていた葉子ではあったが、段々自分も知らないうちに倉地に関心が注がれてしまう。次の引用は自分も知らないうちに倉地に対する内面の変化が読み取れるところである。

事務長は例の insolent な目つきで葉子を一目に見くめるめながら、

「若い方は世話が焼ける……さあ行きましょう」

と強い語調でいって、からからと傍若無人に笑いながら葉子をせき立てた。海の波の荒涼たるおめきの中に聞くこの笑い声は diabolic なものだった。「若い方」……老成ぶつた事をいうと葉子は思ったけれども、しかし事務長にはそんな事をいう権利でもあるかのように葉子は皮肉な竹籠返しもせずに、おとなしくショールを拾い上げて事務長のいうままにそのあとに続こうとして驚いた。（『或る女』 p.131）

葉子自信の倉地に対する思いもがけぬ行動で、自分ながら驚く葉子の姿が伺われる。葉子の普段の性格の面影はどこにいったのか、ここでは全く今まで見たこともない温順な葉子を見ることが出来る。結局、「船にいるすべての人の中で事務長がいちばん気になった。そんなはず、理由のあるはずはないと自分をたしなめてみてもなんのこいもなかった」（『或る女』 p.142）と自分の心の中の思いを省みながら、恐らくある驚きと戸惑いを微かに感じていたであろう。

葉子の倉地に対する思いの変化は、13章の冒頭を境に変わっていたと思われる。上記の引

用も13章の冒頭以後の葉子の姿で、葉子自身は自分の思いもなかったこのような変化に「驚い」ていたわけである。最初は始めて経験した男のタイプとして興味半分の気持であったかも知れない葉子の関心は、時間が経つに従って、葉子の倉地に対する思いの変貌を見せる。いつのまにか、もう葉子の心のなかでは、倉地という男が格別な存在になっていたのである。

## 5 おわりに—13章を読む

ここでは13の冒頭部分を考察して見る。なぜなら、葉子が倉地と一緒にってしまったことは、何よりも葉子の決意があったから可能だったはずだ。13章に注目したいのは、葉子が木村ではなく倉地に惹かれ始める徴候が見えるところであるからだ。特に13章の冒頭の甲板で広げられる夢幻の世界は見逃せない。

この甲板での葉子の感情は激しく興奮した状態である。この感情は、12章の後半の出来ごとが原因である。そこで田川夫妻と出会って色々と話しているうちに、田川夫人は突然倉地の話題を持ち出す。倉地に対することが話題になると、葉子も思わず緊張感を覚える。次はその時の場面である。

「事務長はあなたのお部屋にも遊びに見えますか」

と突拍子もなくいきなり問いかけた。それを聞くと葉子の心は何という事なしに理不尽な怒りに捕えられた。得意な皮肉でも思い存分に浴びせかけてやろうかと思ったが、胸をさすり下してわざと落ち付いた調子で、

「いいえちっともお見えになりませんが……」

と空々しく聞こえるように答えた。夫人はまだ葉子の心持ちには少しも気付かぬ風で、

「おやそう。わたしの方へは度々いらして困りますのよ」

と小声で囁いた。「何を生意気な」葉子は前後なしにこう心の中に叫んだが一言も口には出さなかった。敵意—嫉妬ともいい代えられそうな—敵意がその瞬間からすっかり根を張った。(『或る女』 p.123-124)

田川夫人とこの倉地に関する話が進むにつれて、葉子の心のなかに段々田川夫人に対する「敵意」が芽生え始める。田川夫人は倉地を厄介な存在であるかのような風で話している。これを聞いた葉子は、「何を生意気な」と心にもない嘘を話しているのだと心の中で密かに思う。葉子は上記のような嘘に満ちた、偽善的な田川夫人の発言に不快感を抱く。密かに田川夫人に対する「敵意」の感情を抱いたまま、自分の部屋に戻った葉子は、「鋭い神経の尖って」いたのである。その時、ちょうど部屋に落ちていた倉地の名刺を見つけると「真二つに引裂」い

てしまう。しかも、まだ激された感情を押さえきれないでいる自身が誰かに「裸体」でもみられたような気がして、「激しい戦き」に襲われ、慌てて部屋を出て甲板へ出ていく。そしてこの甲板の場面が13章の冒頭になるわけだ。

暗闇の寒い甲板に佇みながら、葉子は声なのか音なのか弁えぬ、「一種の奇怪な響き」に耳を傾ける。聞こえるその声は「おーい、おい、おい、おーい」と叫ぶ。その叫びは「水と水とが激しくぶつかり合う底の力」から伝わっている響きなのか。もしくは「心の声とも波のうめきとも分からぬ」響きなのか。葉子はただの船の舳先から伝えてくる「時鐘」のような「カンカン、カンカン、カーン」と響く音をおそらく混同していただろう。が、なにしろその奇妙な響きは擬人化された声になり、葉子はそれを聞くともなく聞いている。それが声なのか音なのか、もしくは葉子を探し求める誰かの呼びかけの声なんだろう。いずれにせよ、葉子はその奇怪な音律と共に「音楽的な錯覚」へ徐々に引かれていく。それに、夜の冷えた海風で一段と増した寒さは葉子の知覚をさらに麻痺していく。結局、葉子は「夢遊病者」同様になって、果てしもない夢幻の世界に入ってしまう。

葉子を容赦もなく引き付けた夢幻の世界、そこで葉子を待っていたのは、「屈辱」という恥ずべき感情であった。暗闇の太平洋の沖から伝わる「声が形となり、形が声とな」る音と形との分別もないのを「眼で聞いたり、耳で見」る混沌の感覚に惹きずれられて、葉子が見聞きしたのは、容赦なく葉子のプライドを損ねて、恥の虜にしまった「屈辱」そのものである。しかもその「屈辱」は沖の波壁になって葉子を脅かしている。「屈辱」の波壁に映写されて見える声や聞こえる姿は、外ではなく「皮肉な横目をつかって青味を帯びた田川夫人の顔」となったり、「事務長のinsolentな眼付き」となり葉子を「煩わす」のである。

「煩わす」？何が葉子を「煩わ」しているのか？ここで葉子を容赦もなく「煩わ」しているのは、波壁に映写されていた田川夫人であり、事務長の倉地である。しかし、暗闇の甲板には葉子一人しかいない。今ここには田川夫人も倉地もいない。葉子の夢幻が作り上げた幻想の「屈辱」の波壁が葉子を脅かしていたのである。葉子を「煩わす」その「屈辱」は、十二章の田川夫人との話から巻き起こされた感情がその原因ではあった。それから木村という婚約者に向かう自分の身の前に、思いもなかったある男である倉地の登場と共に、それを振り切ろうしてもなかなか思うように振り切れずにいる自分に対する不満な感情と岡のように容易く心を見せない倉地がその原因でもあった。このように田川夫人と倉地との関係から生じた「屈辱」感であり、その「屈辱」による「煩わ」しさではあったはずだ。

なぜ葉子は「屈辱」から吹っ切れず、「煩わ」されていたのか。この「屈辱」の感情をよく覗いてみると、葉子自身の気高い、時代を先駆ける女性としてのあるプライドが内在しているからである。アメリカ行きの決意で船に乗ることをよきなくされた葉子は、自分のプライドも深い内面の奥に押さえなければならなかったはずだった。だが、田川夫人の偽善的な行為に向かい合ったその瞬間、奥に押さえていた自分のプライドとの衝突によって「屈辱」感に「煩わ」され

たとみえる。それから、今まで自分の思うつぼであったはずの多くの男たちから培えていた葉子のプライドがこの倉地という海の男によって傷つけられたのである。葉子にしてみれば、田川夫人与倉地によって傷つけた感情の傷は、葉子を「屈辱」の感情に導くに充分だった。

これ以後の葉子を変貌させたのは、他ではなくこの「屈辱」であった。葉子の内面奥に押さえていたプライドが甦ってきたからである。そして、その葉子の甦ったプライドは、倉地に向かったのである。葉子は過去に自分の虜にした多くの男たちと同じような虜にするために倉地を操ろうとしたのである。そしてこのような思いに至ってしまった葉子は、もう木村の存在は消えてしまい、倉地に向かう一本道しかいなかったのである。

### 【参考文献】

- 上杉省和(1985)『有島武郎一人とその小説の世界—』明治書院  
 本多秋五(1954)『「白樺」派の文学』講談社  
 安川定男(1967)『有島武郎論』明治書院  
 山田昭夫(1966)『有島武郎』明治書院, pp.130-154.  
 青山孝行(1961)「葉子の中のエリス—『或る女』の明晰な位置づけのために—」『国語と国文学』38(9), 東京大学国語国文学会, pp.38-39.  
 江藤茂博(1984)「『或る女』成立に関する式論—く破滅へへの視座をめぐって—」『武蔵大学文学会雑誌』16(2), 武蔵大学文学会, pp.63-80.  
 小坂晋(1966)「『石にひしがれた雑草』と『或る女』—主人公の精神構造と主題—」『日本近代文学』4, 日本近代文学会, pp.192-213.  
 奥野健男(1959)「有島武郎『或る女』の早月葉子」『国文学』4(6), 学灯社, p.85.  
 佐々木靖章(1972)「く飛躍の論理くの構造—『或る女』論のための一視点—」, 『文芸研究』(70), pp.36-47.  
 笹淵友一(1964)「『或る女』の主題—有島武郎研究—」『東京女子大学附属比較研究紀要』17, 東京女子大学附属比較文化研究所  
 鄭旭盛(2011)「『或る女』論—木部という人物について—」『日本文化学報』第51輯, 韓国日本文化学会, pp.339-451.  
 \_\_\_\_\_(2012)「『或る女』論—田川夫人について—」『日本言語文化』第23輯, 韓国日本言語文化学会, pp.413-427. (DOI:http://dx.doi.org/10.17314/jjlc.2012..23.023)  
 島田福子(1949)「破滅への愛情—『或る女』を中心に—」『文学』17(5), 岩波書店, pp.286-291.  
 外尾登志美(1978)「『或る女』の主題「暗い力」」『日本文学』27(9), pp.50-61.  
 \_\_\_\_\_(1967)「私小説にみた『或る女』」中央公論社版『日本の文学』の『有島武郎・長与善郎』の解説

논문 투고 일자 : 2019. 04. 09.
논문 심사 일자 : 2019. 05. 03.
게재 확정 일자 : 2019. 05. 07.

---

 <要旨>
 

---

## 『或る女』論

—葉子と倉地の関係に関わる一考察—

鄭旭盛

『或る女』は主人公の葉子が破滅していく過程を描いた作品である。特に『或る女』の後編は、専ら葉子の破滅を描いている。だからと思われるが、『或る女』を破滅物語という指摘も多い。

この作品における葉子の破滅の原因は、婚約者である木村に向かって、アメリカ行きの船に乗った葉子に予期せぬ倉地という海男の船員と恋に落ちてしまったことである。船のなかで二人は好ましくない関係になり、葉子はアメリカの地を踏むこともなく、倉地と一緒に日本にそのまま戻ってしまうのである。

本稿は破滅の原因でもあった葉子と倉地との間に生じた恋、その恋に関することに視点をおいて論じたものである。なぜ葉子は木村ではなく、倉地と一緒にになったのか。一体アメリカ行きの船のなかで何か起きたのかを、本稿で論じられている。そして、その原因を探るため、作品の登場人物である倉地を始め、田川夫人と岡について注目した。本稿を通して考察したことからみると、田川夫人と岡は葉子と倉地との好ましくない関係に進行するにおいて過大な影響があると見える。そして葉子は倉地とどのような魅力に惹かれたのか、倉地にいかなる魅力を見ていたかを、本稿を通して論じたのである。

## "A Woman" theory

-A Study on the Relationship between Yoko and Kurachi-

Jung, Ug-Sung

"A certain woman" is a work depicting the process of the hero Yoko's ruin. In particular, the second part of "A certain woman" exclusively describes the ruin of Yoko. I think that is why, but there are many indications that "a certain woman" is a ruined story.

The cause of Yoko's ruin in this work is that he fell in love with the seaman, an unexpected Kurachi, to Yoko, who was on a ship bound for America, towards Kimura, who is his fiancée. In the ship, the two become an undesirable relationship, and Yoko returns to Japan with Kurachi as it is without stepping on the ground in the United States.

This article discusses the love that arose between Yoko, who was also the cause of the destruction, and the love, with a focus on that love. Why is Yoko not with Kimura, but with Kurachi? What happened in a ship bound for America is discussed in this paper. Then, in order to find out the cause, I started with Kurachi, the character of the work, and focused on Mrs. Tagawa and Oka. From the point of view through this paper, it appears that Mrs. Tagawa and Oka have an excessive influence in progressing to an unfavorable relationship between Yoko and Kurachi. And he discussed through this paper what sort of attraction Yoko was attracted to, and what attraction he saw in Kura.